

花ぐるま

田中澄江

花ぐるま

昭和四十九年五月二十八日 第一刷発行

著 者 田中澄江

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二／郵便番号 一―二
電話 東京 (〇三) 九四五―二二 (大代表)／振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

制本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本はおとり替えいたします。

田中澄江 一九七四



花ぐるま
目次

野いばらの実の章

7

りんどうの章

26

しらやまぎくの章

41

つわぶきの章

64

かたくりの花の章

90

ふきのとうの章

104

九重ざくらの章

135

京あおいの章

170

おおまつよいぐさの章

204

まんじゅしゃげの章

220

装幀 三田 恭子

花ぐるま

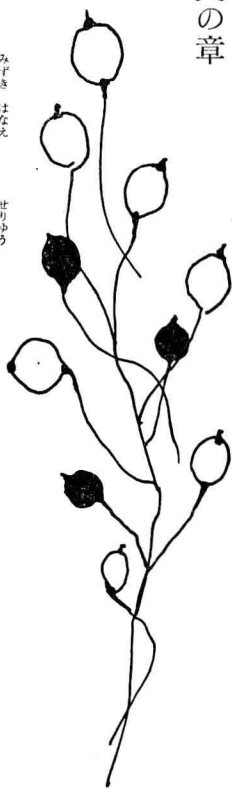
野いばらの実の章

物どころがついた時、みずきはなえ水城花江は、せりゆう芹生の乙女になっていた。

芹生は京の北、スキー場で名高い花背から、歩いて二時間近く、灰屋川の谷に臨む山村である。鞍馬の奥の、鞍馬川の上流から旧花背峠に至り、京見坂を下って芹生谷を二時間あまり、小さな流れに沿って歩いても、芹生の里に辿り着く。

もう一つ、貴船口で鞍馬川の谷と別れ、貴船川に沿って、謡曲の「鉄輪」の舞台になっている貴船神社のかたわらを過ぎ、これも二時間近い道のりで、芹生峠を登りつめていても、その真下の杉林の中に、芹生を見出すことができる。

どちらの道も、京の北の山々を埋めつくす北山杉の緑に被われていて、すがすがしい山気



と、清澄な水のいろが、とても京の町から峠一つ越えただけとは思えない幽邃な趣きをつくり出している。

しかしまた、この車の走りまわる世の中で、登り下り二時間の道を徒歩に頼るというのはやはり京の近く、また、京に遠い場所といえよう。

わずかに貴船口からの道が、戦時中に、京に木材を運ぶ最短距離の林道として幅広くつくれ、車は通るけれど、急坂でカーブが多く、昭和四十年代の今日でもまだ舗装されていない。

スキーの花背まで、あるいは十数戸の家のある灰屋までバスがはいるけれど、あとはジープか単車に頼らなければならない。

花江は小学校と中学を了えた芹生の分教場から、京都府の一番北にある北桑田郡の周山高校に通うのに、妹の友子と自転車で灰屋まで川沿いの道を走り、灰屋の一軒の家に自転車をあずけて、バスに乗り換えなければならなかった。

しかしそれも雪の来ない間のことで、秋も十一月の中頃に、山々の杉木立を、墨絵のような濃淡につつんで雪が降りはじめると、一夜のうちに、日かげの谷の道は三十センチ五十センチの積雪となった。花江や友子たちは、十二月から三月までの積雪期には、周山の町にある学校の近くに寄宿し、土曜日曜にかけて、芹生から同じ高校に通っている竹田吾郎や佐山かつ子と、灰屋から八キロの雪道をラッセルしながら歩くのである。

昭和三十年の秋の半ば、まだ川沿いの灌木の紅葉がいろどりあざやかな土曜日の午後、花江

たち、芹生分教場の卒業生たちは、高校の帰りみちが一緒になった。秋の高校の文化祭の催しものの相談に、分教場の工藤先生のところに来るためであった。

「なんでこないな山深いところに住みついたんやろか」

「せやなあ。せめて灰屋に家があったら」

芹生まではひた走りの道を、自転車のペダルも重く、息をはずませながら、友子もかつ子もうんざりしたように口々に言う。

「おれ、單車買うてもろうたんや。今日はとどいているはずや」

吾郎の家は、このあたりで一番の山持ちである。京の北山の材木は古くから京の町々の家をつくって来た。

貴船口への道が早くからひらいたのは、京都御所の建材が、すべて北山でまかなわれるために、御用材運搬路として重要であったからである。

戦災によって荒れた町々の復興は材木の値上りを生み、北山の谷間にあつて、山の木を育てる家々をゆたかにした。

かつ子の家も吾郎の家と並ぶ山持ちである。

「うちは早う高校を出て、京都か大阪の大学に入りたい。案内書とりよせてどこを受験しようか目下研究中やねん」

「大学いうても短大やろ？　かつ子さん」

友子がいささか、かつ子のゆめに水を差すようにさえぎる。

女ながら、高校の剣道部に籍をおいて、他人に対するときは、相手の弱点をす早くとらえ、上級生であっても、かまわずその痛いところを突くくせがある。

「うちは四年制の大学にいきたいけれど、お母さんが短大にしないのよ」

「どうせゆくなら四年制の男女共学がいいのところがう？　うちは短大は半分きりのうてつまらんと思うわ」

「でもうちのお母さんはね、四年制を出たらもう二十二か三やろ。女には結婚適齢期いうものがあるさかい、短大位がちょうどええ言うてはる」

「へえ。これから大学を受けるいうひとが卒業後の縁談まで心配するのん？　ほなら学校なんてやめて早う、結婚したらええのに」

友子は威勢よく言い放って、お先に失礼。花江をも追い越して、鋭いカーブの道を鮮やかに走り去っていった。

「花江さん。あなたは卒業してどないしはるの？」

かつ子は花江に追いついて声をかけた。

「あなたこそ卒業したらすぐ結婚しはるんやない？」

（そないなことは絶対にせえへん。）頭から打ち消したい。しかし花江は、自分の斜め前を走っている吾郎が、自分の返事に耳をすましているにちがいないと思い、吾郎の耳に聞えるところ

ろで、結婚などという言葉を口に出したくなかった。道ばたの野ばらが、すっかり葉は枯れ落ちながら、真赤な実を枝いっぱいつけているのが美しく、自転車を下りてとっていると、

「花江さんはもう結婚の相手がきまってはるんやない？」

かつ子も自転車を下りて迫ってくる。かつ子が、その相手としてあげたいのは、いま自分たちのかたわらにいる吾郎なのにちがいない……。

「うちも先に帰る」

花江は野ばらの実をかばんにさしこむと、ペダルに力をこめ、友子のあとを追った。

「おい。花江くん。工藤先生ところに三時集合やで。文化祭の実行委員いうこと忘れずにきつと来てほしいわ」

一番最後から、みんなをまとめるように、ゆっくりと走りながら、大きく叫ぶ吾郎の声を胸に熱く流しながら……。

家には杉の枝打ちや伐採の山仕事で、日当をかせいでくる父の克次と、背戸裏の畑づくりやたきもの拾いもあって、山家の家事に忙がしく明け暮れる母のときがいる。

まだ水城の家に山がたくさんあった頃、克次の父の代から京の嵯峨に別宅を持っていた。青年時代の克次は、灰屋川から周山を通って大堰川となり嵐山の裾を洗い、保津川となって下る川に材木を托し、嵯峨の間屋に売りさばいて、かなり自由に金をつかうことができた。

西陣の織屋で働いていたときは、見合で結ばれたけれど、屈托のない明るいときの性格

と、おうような育ちのよさを見せておとなしい克次とのうまがあうのか、花江と友子の下に小學生の新太とまだ学齡前のたつ子をかかえて、結婚後二十年近い月日をむつまじく過して来た。

ただ一つ、花江と友子を妻の手に残して戦争の末期に大陸に出征し、無事帰還したあとは賭けごとのおもしろさを覚え、嵯峨の家はおろか、持ち山の大半を手放してしまったことが、ときにとつてくりかえされる愚痴になっていたけれど。

「お帰り」

花江は母にむかえられた台所の土間に、山と積まれた泥だらけの大根を見た。

「ま、これみんなうちでつくった大根？」

「せや。もうすぐ霜が下りるさかいに皆抜いて来てしもうた。沢あん漬けにしよう思うて」
すぐ家の前を流れる谷川で、晩までに洗ってしまうと言いながら、痛そうに腰をたたいている母を見ると、花江はすぐに分教場へゆくとは言いそびれてしまった。

友子も裏山に、晩秋の風で落ちた枯枝を拾いにいっているという。

学校の制服をスエーターとモンペに着かえ、縄でくくった大根を谷川のそばに運んだ。流れは川底の石が数えられるほど美しく澄み切っていて、泥のついた大根をぎっぷりとつけ、藁縄を小さくまいたたわしでこすると、瞬間に泥は洗い流されて雪のように純白な姿に変わる。

分教場では、もう文化祭の相談がはじまったかもしれない。

吾郎やかつ子の外に、男子と女子と合せて五、六人の高校生が集まっているはずである。

準備委員の花江があらわれないと、何かと進行しないかもしれない。

芹生は歌舞伎の菅原伝授手習鑑に出てくる大事な場面の舞台であった。

平安時代の初期、六十代醍醐天皇に仕えて、右大臣であった菅原道真は、時の権力者である藤原時平によって宮廷を追われ、遠い九州太宰府の権帥におとされてしまう。

道真の家臣で、丹波の園部の代官をつとめていた武部源藏は、時平にねらわれる道真の子供とその夫人をつれ、山また山の重なる北山の谷深く、芹生の里にかくれた。

その頃の芹生には何十戸かの人家があつたらしく、源藏屋敷のあとと伝えられて谷間の平坦地に石垣が残され、菅原道真をまつる天満神社がたっている。

源藏は、寺小屋をひらいて村の子たちを集め、道真の子供の菅秀才を、自分の子供と言つて、他人の眼からまもつた。

しかし、いつか京に聞えて、菅秀才を殺してその首をさし出せ。その首あらための役人として、松王丸をさしむけると言われてしまう。

その朝、千代と名乗る女が、菅秀才と、年も同じ位の子供をつれて、寺小屋に入れてもらいたいとのみに来た。

「では又、帰りに迎えにまいります」

いそいそと出てゆく母のうしろ姿に、源蔵とその妻の戸浪は顔を見合わす。

（松王丸がくる前に、あの子を殺して、菅秀才の身代りにその首をさし出そう。）

暗黙の許容がそこにあった。現代から考えると、自分の主君の子供のいのちを助けるために、何も知らぬ他人の子供を殺すなどとは許し難い罪悪である。

しかし、この歌舞伎のつくられた徳川時代にあつては、主君のためならば、どんな犠牲も払わなければならぬのを忠義とした。

忠義は、武士にとって、最大の美德であつた。日頃は山や谷川に遊んで、いろも真黒な村の子供たちとちがつて、見るからに良家の子弟らしい色白の気品ある子供が、わが家につれてこられた時、源蔵の心はきまつた。

やがてたぐさんの家来をつれて松王丸がこの寺小屋にあらわれる。

「源蔵、たしかに菅秀才の首を討ったか」

「はいたしかに」

やがてしずしずと持って来られた首桶。松王丸は大きな身のこなしのあとで、首桶をのぞく。うなずく。まちがいがないという重々しい声に、源蔵夫妻はほっとする。もしも、まちがいだ、にせものだと言われたら、その場で松王丸を殺す覚悟であつた。にせの首桶を持って、松王丸一行の帰ったあとで、殺された子供の母の千代がくる。

「どうもおせわさまでございました」